

リオ・デ・ジャネイロ日系協会

会長 淀川 三男



この度、貴会議所の創立五十周年に際し記念誌が刊行されるに至りましたことを、ここに心よりお慶び申し上げます。また、創立以来今日まで、当日系協会に対して並々ならぬご援助をいただきましたことを、誌上をお借りして、御礼申し上げます。

思えば一九五五年「リオ日伯商業会議所」が発足するまでの戦後十年は、日伯共に激動の時代であったと考えられます。低資源国日本に於いては、海外からの引揚者やベビー・ブームによる急激な人口圧力が発生し、これを支える生産設備は荒廃しきっており、海外に活路を求めざるを得ない状態でした。

幸い人口圧力は、戦前諸先輩移住者の築き上げた伯国からの信頼により、サンフランシスコ講和条約直後にブラジル移民が再開されました。

また、戦後貿易立国を標榜していた日本の生産設備は、朝鮮動乱やベトナムへのアメリカ軍事介入による、間接的な軍事景気で徐々に回復に向かっていた矢先に、ヴァルガス大統領に始まる積極的な工業化政策に助けられて、ブラジルに販売拠点を作り上げることが出来ました。

一方、資源大国ブラジルは、第二次世界大戦末期にヴォルタ・レドンダ製鉄所の建設を開始し、資源のアキレス腱であった石油についても、バイーヤでペトロブラスが石油の開発を開始し、当時まだわずか3社の日本進出商社が売り込みに走ったと言われています。

このようなブラジルの高度成長突入期に、相互補完の将来志向を基に、貴会議所が1955年に誕生し、半世紀にわたる日伯両国の繁栄に寄与された歴史的意義は絶大であります。改めてお祝い申し上げます。

そして16年後、貴会議所が「リオ・デ・ジャネイロ本商工会議所」と改名されるまでの間、両国は共に経済発展を遂げ、日伯関係の緊密化は更に増大し今日に至っております。

改名されたその年、日本では戦後の貿易立国の標榜通り、世界第二の経済大国への道を歩むのですが、ドル・ショックによる日本円の切り上げで高度成長に陰りが見えはじめ、その後の第一次石油危機・ベトナムからのアメリカ撤退等の外需減から、高度成長期は終焉したとされております。

一方ブラジル・サイドを省みますと、貴会議所が創立した翌年に、クビチェック大統領が就任するや、「5年間に50年を」の工業化促進計画とブラジリアの建設計画が発表され、その繁栄は頂点に達し、1968～1973年には「ブラジルの奇跡」と言われて、成長率11.2%を軍政下で記録しました。

この時期、基幹産業の鉄鋼・造船・自動車工業の誘致があり、日本からの進出はウジミナス・イシブラス・トヨタであったのは周知の通りで、その「奇跡の成長」中に貴会議所は改名され、日伯経済交流の拠点として発展されました。

爾来34年、変動の世界を乗り越えた創立半世紀の貴会議所の歴史は、相互補完の初志貫徹の歴史であり、日伯協調の歴史であり、ご関係者のご努力に深甚の敬意を表します。貴会議所が今後益々充実され、日伯経済交流の掛け橋としての役割を果たされることを祈念して、私の祝辞と致します。